儒林外史

中国古典文学大系 43

平凡社

中国古典文学大系 43

儒林外史

呉敬梓 作　稲田孝 訳

平凡社

訳者紹介

稲田 孝（いなだ たかし） 1915年東京生。東京大学文学部卒。専攻中国文学。現職 東京学芸大学教授。訳著書 「新老子・列子物語」（河出書房）「中国故事物語」（河出書房）

中国古典文学大系 全60巻

儒林外史 第43巻

1968年10月5日 初版第1刷発行
1985年10月4日 初版第13刷発行

訳者 稲田 孝

東京都千代田区三番町5番地
発行者 下中邦彦

発行所 郵便番号 102
東京都千代田区三番町5番地
振替・東京8-29639
株式会社 平凡社

不良本のお取換えは直接読者サービス係までお送り下さい（送料は小社で負担します）。
定価は外箱に表示してあります。

印刷 東洋印刷株式会社
製本 株式会社 石津製本所

© 株式会社 平凡社 1968 Printed in Japan

ISBN4-582-31243-8

儒林外史　主要人名表

（排列はアイウエオ順。括弧内は字）

伊昭　国子監学生。泰伯祠に参加。

韋闌（韋のおじ様）　杜少卿の父の同学の知己。

王蘊（玉輝）　安徽省徽州の老秀才。娘がその夫に殉死する。

王義安　江蘇省儀徴の淫売屋の主人。

王恵　山東省莫州府汶上県の挙人。はるかに年少の荀玫と同年の進士。南昌府知事に任ぜられ能吏ぶりを発揮して江西寧王の乱の時に南贛道観察となるが、敗れて寧王にくだり、のち行方不明、郭力の父。

王太太　南京内橋の胡家の娘。夫に死別し、沈夫婦の口車で鮑廷璽と再婚。

王徳・王仁　兄弟。致和の妻の兄、いずれも鹽賭生員。

王留歌　莫愁湖の競演で第三等の女形。姉が杜慎卿の妾。

郭鉄筆　安徽省蕪湖の人。印形屋。泰伯祠に参加。

郭力（鉄山）　王恵の子。行方不明の父をさがして二十数年を苦労する。武芸の達人。

葛来官　莫愁湖の競演で第二等の女形。

甘露庵和尚　安徽省蕪湖の甘露庵で牛布衣の死を見取る。のち京師の報国寺の住職を経て陝西省同官県海月禅林の住職。

季萑（芦瀬）　安徽省懐寧の人。父は守備。尚知事のもとで府試に一等合格、美貌で風流才子。鮑廷璽と姻戚関係。モデルは作者の親友のひとりという。

季恬逸　安徽省安慶の人。季萑の友人。泰伯祠に参加。

蘧祐（坦庵）　蘧太守ともよぶ。浙江省嘉興県の人。南昌府の太守を退官後、自適の生活をおくる。

蘧景玉　蘧祐の子。范進が山東学道の時の幕客。のち父のもとで働き、壮年で死ぬ。

蘧来旬（読夫）　蘧公孫とよばれる人。魯家の婿となる。泰伯祠に参列。

匡迥（超人）　浙江省温州府乗清県の人。家が貧しく杭州で零落しているのを馬二先生に助けられる。孝心厚く好青年だが、秀才となるに及び人が変わる。のち朝廷の教習に出世。

牛布衣　浙江省紹興府の人。山東学道范進の幕客。のち流浪して蕪湖の甘露庵で死ぬ。

牛浦郎　安徽省蕪湖の人。祖父が貧乏商人。牛布衣の名を騙り名士になりすます。厚顔の少年。

牛瑤（玉圃）　安徽省徽州の人。塩商万雪斎の世話になっていた。

金次福　南京の俳優。

金寓劉　揚州の名士。泰伯祠に参加。

金有余　周進の姉婿。商人。仲間と周進を助けて郷試受験の資格を買ってやる。

金東崖　浙江省山陰県の人。中央吏部の書記であったが、金をためて帰郷、子供を不正入学させる。泰伯祠に参加。

虞育徳（果行）　蘇州常熟県の人。貧苦より身を起こし国子監博士となる人。人望高い有徳の人。泰伯祠の主祭者。

虞感祁　虞育徳の子。泰伯祠に参加。

虞梁（華軒）　安徽省五河県の人。余兄弟の母方の従弟。神童と称され、学識文才あり、秀才。曾祖父は尚書で門地高し。

倪霽峯　秀才だが零落して子供をみな手放す。楽器修理業。

景本恵（蘭江）　浙江省温州府の人。頭巾屋を杭州で営むが、詩に熱中して本職を忘れる。

嚴大位（致中）　広東省高要県の貢生。狡猾で陰険。致和の兄。

嚴大育（致和）　致中の弟。監生。小心者。死後、妾が家督のことで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

政中と争う。

胡　縝（密之）　浙江省杭州の名家の子。父が吏部尚書。名士気取りでいるが、けちで名高い。

洪憲仙　浙江省天台県の人。商人であるが錬銀術に熱中する。

向知事　名は鼎、章安東県知事の後任。のち安慶府知事、福建省汀漳道台。

高老先生　天長の隣県六合の人。翰林院侍読であるが、低俗野郎。

国公府（徐家）　中山王府のこと。南京に住する貴族。

権勿用（潛斎）　浙江省蕭山県の農家の出身。三十年勉学して秀才になれない。要家の食客として餐霞湖の会に参加。

支　鏘（剣峯）　趙雪斎らの詩友。

周　進　薛家集の村塾の老先生。姉婿らの援助で郷・会試に合格。のち出世して広東学道・国子監司業（副校長）となる。

荀　玫　山東省兗州府汶上県の農民の出身。周進の村塾の生徒。王惠と同年で進士合格、両淮塩運使となる。

徐　瑛（象一公子）　国公府の次男。国公府を見よ。

徐　詠（徐九公子）　国公府の九男。国公府を見よ。

諸葛佑（天申）　安徽省旌陽の人。泰伯祠に参加。

蕭吳軒　成都の人。武人。蕭雲仙の父。

蕭雲仙　成都の人。弾弓にたくみ。松潘の職に功あり、のち江淮衛守備となる。

蕭　卿（金鉉）　安徽省安慶の人。泰伯祠に参加。

吳樹滋（敬軒）　揚州の人。蕭姑娘と呼ばれる。

申祥甫　山東省兗州府汶上県薛家集の農民。

辛東之　揚州の名士。泰伯祠に参加。

沈大年　江蘇省常州の人。青根城で蕭雲仙を助けて学校を営む。

沈瓊枝　沈大年の娘。塩商宋為富の妾にされるところを南京に逃亡。

沈天孚・沈の大脚　南京の人。夫婦で仲人商売。

鄒吉甫　浙江省湖州府の要家の墓守。

荘尚志（紹光）　南京の代々の読書人。礼部侍郎の推薦で博学鴻詞科に赴くも仕官を辞退、元武湖の花園を賜わる。徵君とも称せられる。作者と知己の当時の著名な学者程廷祚がモデルという。

荘　潔（潛江）　杜少卿の父の従兄、荘紹光の甥。ただし年齢ははるかにうえ。

荘非熊（蓼斎）　安徽省天長県の人。杜少卿と同年の秀才。

臧　荼（蓼斎）　江蘇省句容県の人。盧華士の家の家庭教師。古礼に詳しく、泰伯祠の企画者。

倪　信　国子監学生。泰伯祠に参加。

趙　灝（雪斎）　浙江省杭州の医師兼詩人。

張師陸（静斎）　范進と同郷の郷紳。

張俊民（鉄塔）　安徽省天長県の人。武芸百般に通じた侠客を自称。要家の食客となり、のち杜少卿の家に医師として出入する。

陳　礼（和甫）　江西省南昌県の人。占い師兼医師。名士を騙り歩いている。

鄭魁官　莫愁湖の競演で第一等の女形。

杜　儀（少卿）　安徽省天長県の杜家の二十五番の若様。父は江西省贛州府知事。作者がモデルとなっている人物。

杜　倩（慎卿）　天長の杜家の十七番の若様。父は礼部尚書。南京の莫愁湖で季蕙蕭と少年女形の競演の会を催し風流の名を高からしめる。男色癖あり。進士に合格。作者の従兄弟吳檠（青然）がモデルといわれる。

湯奉　広東省高要県知事。江蘇省儀徴の人。鎮台湯秦の兄。回教徒。

湯由　江蘇省儀徴の人。湯鎮台の長男、ぐうたら息子。

湯寅　右に同じく湯鎮台の次男、ぐうたら息子。

湯鎮台（名は秦）　広東省高要県の湯知事の弟。湯家は回教徒。貴州の苗族平定に功あり。

董瑛（董知事）　江蘇省安東県知事。のち貴州に転任、牛浦郎にだまされる。

馬静（純上）　浙江省処州府の人。馬二先生として親しまる。有名な選文家。杜少卿と知り合い泰伯祠に参加。

梅玖　山東省登州府汶上県の秀才。

范進　広東省南海県の貧乏老童生。周進のもとで秀才に合格、以後順調に挙人、進士とすすみ、山東省学道・通政使などとなる。

万雪斎　揚州の大塩商。

潘自業　潘三ともいわれる。杭州府の下役人兼無頼漢。

馮琢菴　牛布衣の知人。進士に合格、主事を授かる。

武書（正字）　江蘇省江寧県の人。国子監学生。身長がきわめて低い。泰伯祠に参加。

浦玉方（學卿）　趙雪斎らの詩友。

鳳鳴岐　武芸に通じた義侠の人。

鮑文卿　南京水西門の住人。祖先代々の芝居商売、座頭をやっていて杜家にひきたてられる。

鮑廷璽　倪霜峯の子。鮑文卿の養子となり、父の死後文元座主となる。

余蕙（和吉）　安徽省梁石の人。余美人といわれる。泰伯祠に参加。

余特（有達）　安徽省五河県の人。貢生。長年転々と家庭教師を勤めていたが、のち徽州府学訓導となる。学識あり。モデルは作者の亡妻の姉の夫。

余持（有亜）　特の弟。秀才。よく兄を思う。

楊允（執中）　浙江省湖州府の貢生。妻兄弟に招かれてその食客となり、鷺脰湖の会に参加。

来霞士　揚州の道士で詩人。

盧華士　杜少卿の母方の甥。

盧德（信侯）　湖広武昌府の人。藏書家。泰伯祠に参加。

巻編修　浙江省湖州府の人。翰林院編修を退官。

婁瑛（玉亭）・**婁瑋**（瑟亭）　浙江省湖州府の名家の次男と三男。次男の玉亭は秀才、三男は監生。亡父は中央官署の最高官たる大学士、長男は通政使。鷺脰湖の会を催す。不平の徒。

婁燦文（婁のおじ様）　杜少卿の父が面倒を見た人物。父の死後、少卿一家を支えた。少卿は父のごとく慕っている。

監修

入矢義高

倉石武四郎

松枝茂夫

小野忍

増田渉

装幀　原弘

目次

主要人名表……前付七

第一回……三
櫻子を語って大意を述べ
名士を借りて全文をしめくくる

第二回……一四
王挙人が村の学校で同年の合格者を知り
周先生が晩年に上級の科第に登る

第三回……二六
周学道が学生より真才を抜きんで
胡豚屋が凶行を演じて吉報をさわがす

第四回……三九
追善を仰せつかって和尚が訴えられ
秋風を行なって郷紳が災難にあう

第五回……四九
王秀才が妾を正妻にしようと慮り
歳監生が病んで寿を終える

第六回……五九
郷紳が病んで船頭とひとさわぎし
寡婦がひどい仕打ちに兄を訴える

第七回……六九
范学道が試験官となって恩師に報い
王員外が朝に立って友誼を尽くす

第八回……七九
王観察が窮途で良き知合いに逢い
妻公子が故里で貧しい者と交わる

第九回……八八
妻公子が金を投じて朋友を贖い
劉守備が妓をいつわって船頭を打つ

第十回……九七
魯翰林が才を愛して婿に選び
蘧公孫が招かれて富家に入る
第十一回……一〇六
魯家の娘が八股文で新郎をこまらせ
楊教諭が大臣の府に賢士をすすめる
第十二回……一二五
名士が大いに驚胆湖に宴し
侠客がいつわりの生首会を設ける
第十三回……一三四
遅駑夫が賢を求めて学業を問い
馬純上が義を行なって財をうとんずる
第十四回……一三五
蘧公孫が書坊にて良友を送り
馬秀才が山洞にて神仙に遇う
第十五回……一四一
神仙を祭り馬秀才が喪を送り
父母を思う匡衡生が孝をつくす
第十六回……一五〇
大郷荘にて孝行息子が親に仕え
楽清県にて賢き高官が士をいつくしむ
第十七回……一五九
匡秀才がふたたび旧地に遊び
趙医師が詩壇に高名をはせる
第十八回……一六七
詩会に名士が匡・趙人をさそい
書店に朋友をたずねて潘三に会う
第十九回……一七五
匡・趙人が幸いにも良友をえ
潘自業が無残にも禍にあう
第二十回……一八五
匡・趙人が長安道で楽しい目にあい
牛布衣が蕪湖関で客死する
第二十一回……一九二
若者が妓名をいつわって名声を求め
老人が親戚を思うて病に臥す
第二十二回……二〇〇
玉圃が祖・孫と認めあって一族となり
雪斎が交遊を愛して客をとどめる
第二十三回……二〇八
秘事をあばいて詩人が打たれ
老いを嘆じて寡婦が夫をたずねる

第二十四回 ……二一七
牛浦郎が多くの裁判沙汰にかかりあい
鮑文卿が昔の生活をとりもどす
第二十五回 ……二二五
鮑文卿が南京で旧友に会い
倪廷璽が安慶で花婿となる
第二十六回 ……二三五
向知事が昇官して友を哭し
鮑廷璽が父を失って妻をめとる
第二十七回 ……二四二
王太太が夫婦で反目し
鮑廷璽が兄弟あい逢う
第二十八回 ……二五〇
季葦蕭が揚州で花婿となり
蘇金銘が白下で書を選する
第二十九回 ……二五八
諸葛佑が僧寮で友に遇い
杜酒卿が南京で姫をいれる
第三十回 ……二六七
若き俊才を愛して友を神霄殿に訪ね
風流をほしいままにして英雄酒にあい集う
第三十一回 ……二七五
天長県にともどもに寡婦を訪ね
鳴書楼で良友がしたたかに酔う
第三十二回 ……二八四
杜少卿が平素に豪傑の振舞いし
妻燉文が臨終に遺言する
第三十三回 ……二九二
杜少卿が夫婦で山に遊び
遅衡山が朋友と礼を論じる
第三十四回 ……三〇一
名士が礼楽を議するために友を訪ね
天子が三旌を備えて賢を招く
第三十五回 ……三一
聖天子が賢を求めて道を問い
王徽君が爵を辞して家に帰る
第三十六回 ……三一〇
常熟県に真儒が生まれ
泰伯祠で名賢が祭をつかさどる
第三十七回 ……三一八
先聖を南京に祭って礼を修め
孝子を蘆溝に送って親をたずねしめる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第三十八回……三三八
郭孝子が深山で虎にあい
甘露僧が彼路で仇にあう
第三十九回……三四八
蕭雲仙が難を明月嶺に救い
平少保が青楓城に勝利をあげる
第四十回……三五三
蕭雲仙が広武山で雪を賞し
沈瓊枝が利渉橋で文を売る
第四十一回……三六二
荘瀟江が昔を秦淮河になつかしみ
沈瓊枝が江都県に送りかえされる
第四十二回……三七一
貴公子が妓院で科場を説き
家人が苗族の地から消息をもたらす
第四十三回……三七九
野羊地で将軍が大いに戦い
歌舞の地に酋長が軍営をおかす
第四十四回……三八七
湯鎮台が功を成しとげて故郷に帰り
余明経が酒の宴で弊事を問う
第四十五回……三九四
友誼あつくして兄に代わって過を受け
墓所を講じて家に帰って親を葬う
第四十六回……四〇三
三山門に賢人が別れをおしみ
五河県は金と権勢に首ったけ
第四十七回……四一一
虞秀才が元武廟を改修し
方塩商が節孝祠を賑わす
第四十八回……四二一
徽州府にて烈婦が夫に殉じ
泰伯祠にて遺賢が昔をしのぶ
第四十九回……四三九
翰林が竜虎榜を談論し
中書が鳳凰池に身分を騙る
第五十回……四三八
偽の官員が街頭に恥をさらし
真の義士が友人のため名を取り持つ
第五十一回……四四五
少婦が人を騙って色事を仕損じ
壮士が典にまかせて官刑を試みる

第五十二回……四五一
武芸を比べて公子が身を傷つけ
広間を荒して英雄が貸しを催促する
第五十三回……四六〇
園公府にて雪の夜に客を招き
来賓楼にて燈心が夢を驚かす
第五十四回……四六八
病める佳人が青楼にて運命を占い
こけ名士が妓館にて詩を献ずる
第五十五回……四七八
四客を添えて今昔の感を述べ
一曲を高山流水に弾じる
解　説……四八九
参考付図(一)……巻末
参考付図(二)……巻末

儒林外史

稲田孝訳　呉敬梓作

第一回

楔子を語って大意を述べ
名士を借りて全文をしめくくる

人の世は北に南に分れ路
将軍・宰相、はた神仙も
はじめはただの凡人なり
百代の興亡は朝また暮
江風は吹き倒す前代の樹

功名富貴ははかないものぞ
心情をつかいはたして
年月をむだにするばかり
濁酒三杯よいしれよ
水流れ花落ちて行く先いずこ

この一首の歌、いつもながらの老書生の陳腐なきまり文句で、功名富貴は、そもそもがわが身中のものではない、といっているだけのこと。ところが世のひとびと、ひとたび功名富貴を眼前にすると、生命を投げ棄ててこれを追い求め、さて、手にしてみれば、その味は蠟をかむようなのである。古よりこのかた、いったいどれだけの人がこのことを見破ったであろうか？

とはいえ、かつて元朝の末のころ、並みはずれて磊落なひとりの人物があらわれた。姓は王、名は冕といい、浙江省紹興府諸暨県の片田舎の人。七歳の時、父親に死なれたが、母が針仕事をして、村の塾にあげてくれ、読み書きを習った。

またたくまに三年たって、十歳になった時、母が王冕を膝もとに呼びよせて、

「あのね、お母さんはおまえの勉強を好きこのんで邪魔だてするつもりはないんだけど、ただお父さんがなくなったあと、お母さんはやもめ暮し、出るほうばかりで、はいって来るものはないし、おまけに年柄が悪くて、お米は高い。少しは残っていた古い着物や家の道具も、質草になるものはしたし、売れるものは売ってしまいました。お母さんが、よその家の針仕事をしてかせぐお銭だけでは、とてもおまえを学校へ通わせてはあげられないんだよ！　もう仕方がないから、おまえをお隣の家の牛番にでも使ってもらえないかと思ってね、毎月少しはお銭もいただけるだろうし、おまえのご飯も食べさせてもらえるだろうからね。明日にでも行ってみようじゃないの！」

「お話のとおりです、お母さん！　ぼく、学校に行っていても、ほんとは楽しくなかった。それより、お隣に行って牛の番してるほうが、よっぽど愉快です。勉強しようと思ったら、いままでのように本を持っても行けるんだし」

その夜、ふたりは話をきめ、翌日、母が隣の秦家へ連れて行った。秦老人は親子を引きとめて朝の食事をとらせると、一頭の水牛を引っぱってきて王冕にわたし、門の外を指さしながら、

「すぐそとの表門から二、三百歩もいけば七湖だ。湖の岸は一面の草で、どこの家の牛も、あそこで昼寝するんだよ。それに、ひとかかえもある大きなしだれ柳が何十本もあって、とても涼しいし、牛もの

どがかわけば、すぐ岸辺でのめる。坊はその近くでだけ遊んでて、遠くに行ってはいけないよ。この爺さんは、毎日二度のご飯とお菜はかかさぬようにする。そして毎朝、二銭ほどお銭をあげるからお菓子を買って食べな。まあ、なにごとにつけ怠けずに一生懸命やることだね！」

母がご馳走になった礼を言って帰るのを、王冕は門まで見送った。母は王冕の着物をなおしてやりながら、

「おまえ、よく気をつけて、ひとさまから悪く言われることのないようにね！　朝は早く出かけ、夕方は遅く帰ってくるようにして、お母さんに心配させないでちょうだい」

王冕はうなずいた。母は眼に涙をためて帰って行った。こうして王冕の秦家での牛の番が始まった。王冕は毎日黄昏時になって家に帰り、母と床につくのだった。

たまたま秦家で虫漬けの魚や肉を煮て王冕に食べさせたりすると、王冕は蓮の葉につつんで持って帰り、母にすすめた。また、毎日の菓子代は使わずに、一、二ヵ月分をためると暇をぬすんで村塾へ行き、学校懇りの本屋が来ていれば、古本を少し買い入れてきて、毎日牛をつないでおいて、柳のかげで読むのだった。

三、四年がまたたく間にすぎた。王冕は読書のおかげで、よく物事がわかるようになった。

ある日、ちょうど梅雨時のことで、むしむしする天気だった。牛番に疲れた王冕が、草の上に腰をおろしていると、しばらくして濃い雲がたれこめ、ひどい夕立が通りすぎた。やがて黒雲のへりに白い雲がかがやいて、しだいに散っていき、その到れ間から一条の日の光がもれ、湖一面を真っ赤に照らし出した。湖辺の山々は、あるものは青く、あるものは紫に、またあるものは紺色をしている。樹の枝は水に洗われたあとそのままに、ことのほか美しい緑だった。湖上に十本ばかりの蓮の花があって、花荷を水がすべり落ち、葉の上には水玉がコロコロころがっている。

王冕はしばらく眺めながら考えた。

「『人は絵の中にいる』とは昔のひとの言葉だが、全くそのとおりだ。しかし、残念ながらここにはひとりの画家もいない。この蓮の何本かを絵に描いたら、さぞかし面白かろうに！」

さらにまた考えた。

「世の中に学んでできないことはない。……そうだ、ぼくが自分で描けばいいじゃないか！」

とそんなことを考えている時、遠くに人足の姿が見えた。闕持をかつぎ、酒瓶をぶらさげ、闕持の上には毛氈がかけてある。柳の下まで来ると、その毛氈を敷き、闕持をあけた。そのあとからやって来た三人の人物は、みな頭に方巾（読書人のかぶる角頭巾）をのせ、ひとりは群青色の薄絹のあわせの直裰（僧衣のように大袖で、前でえりをあわせる普段着、道袍ともいう）、あとのふたりは黒い直裰を着、年のころは四、五十の見当、白い紙扇を動かしながら、ゆったりと歩いてきた。群青色の直裰の人物は太っていて、木の下までやって来ると、ひげをはやした黒い直裰の男に上席をすすめ、もうひとりの痩せている男には、ひげの男と向い合せに坐らせた。太っちょが主人なのだろう、下座について酒をついだ。

しばらく飲み食いしていたが、やがて太っちょが口をひらいて、

「危先生がおもどりになって、新たに住いを手に入れられたが、それが京師の鐘楼街にあったお宅より、ぐっと大きくて、値段が銀二千両。持主は、この先生がお買いになるんなら自分のほまれになるのだからと、三、四十両もまけて売ったんです。先月の十日に引っ越しなさっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook